



# 自立活動部だより

第1号 平成27年7月23日発行

新年度が始まって3か月が過ぎ、子どもたちは夏休みに入りました。我々職員にとっては、この1か月は夏休み以降の活動について色々なアイデアを膨らませたり、今までの活動を整理し直したりする貴重な期間となります。今年度初の自立活動便りでは、7月3日に行われた秋田県総合教育センターのC講座「よく分かる自立活動」において、茨城大学准教授新井英靖先生がお話しされた内容を加味しながら、外部専門家との連携をテーマに情報発信したいと思います。今後の学習活動にお役立ていただければ幸いです。

## 外部専門家支援について

本校では平成19年度の作業療法士(OT)の導入を皮切りに、翌20年度には理学療法士(PT)、26年度よりは言語聴覚士(ST)と、3人の外部専門家が配置されています。さらに昨年度の校内研修においては視能訓練士(ORT)の先生との繋がりをもつことができました。外部専門家導入のメリットは、我々教員ではなかなか気付きにくい医療としての視点を指導に与えてくれることです。つまり、障害をもっと深くみつめるためには、外部専門家を上手に活用することが不可欠であると言えます。外部専門家の導入は、主に肢体不自由や言語障害などの児童生徒を対象に行われてきたという歴史がありますが、近年、知的障害の学校においても、自立活動の指導の充実を図るという観点から導入される例が全国的に増えているとのことです。

### 本校での支援の様子

先生方が日頃感じている疑問点を専門家の先生方に聞いたり、専門家の先生の方から、『この子の気になる〇〇』についてお話があったり。自立活動部でうまく橋渡しができるよう頑張ります。

ズックの着脱の指導がなかなかはかどらなくて・・・。



自分の気持ちをサインやジェスチャーで伝えたり、語彙を増やしたりするには？



座って勉強できるようにしたいけど、姿勢大丈夫かな？

## 外部専門家支援活用のポイント



外部専門家の先生を上手に活用するためには、いくつかポイントがあります。新井先生のお話や、国立特別支援教育総合研究所の長沼俊夫先生のお話から、3点あげてみました。

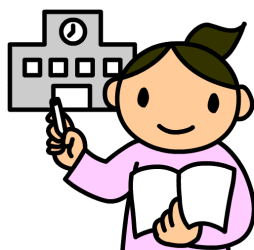
- 1 外部専門家の先生方に対しては、『**教えてもらう**』のではなく、『**一緒に考えてもらう**』というスタンスで関わるのが大事である。また、校内組織の連携があつてこそ、外部専門家との効果的な連携・協働ができる。
- 2 外部専門家の先生方は、医療的立場の専門家。**アドバイスを受けた内容を、教育的な見地でアレンジし、学習活動に取り入れることができるのは、教育の専門家である先生方の仕事。**
- 3 外部専門家の先生方から受けたアドバイスを基に子どもの教育活動を考えても、すぐには効果が出ないこともある。専門家の先生といえども1回見ただけではその子どもに最適なアドバイスができないこともある。**やったことを再度見てもらって、また一緒に相談し直すことや、じっくり時間を掛けて取り組むことも必要**である。

新井先生のお話に関しては、8月3日(月)の研修会でさらに詳しい内容や、授業への取り入れ方についての提案を聞いていただきたいと思います。

## 今後の外部専門家支援の方向性について

本校の教育プランには、“外部専門家(OT、PT、ST)の授業づくりへの参画”という文言があります。今までのように児童生徒を抽出してアドバイスをいただくだけでなく、各学部の授業自体も見てください、障害によって活動が阻害されている部分はないだろうか、またどのようにアプローチしていけばよいのかなどについても、ご意見をいただく機会を設けていきたいと考えています。

全国的には知的障害が主障害である児童生徒の学校にも、外部専門家の先生方が導入されるケースが増えてきたとはいえ、本校は全体的にみても恵まれた環境であるといえます。この環境を生かし、児童生徒の自立と社会参加を目指し、協力し合っていく仲間として、外部専門家の先生方に気軽に悩みや疑問をお話しいただきたいと思います。



自立活動に関しては、他の先生方の実践がヒントになることも多いと思いますので、事例報告会や「自立活動のレシピブック」を是非ご活用ください。